

風強ければ 神様は靴のかか す に 棲みたもう

私は父の事が大大好きでした。父はハーフなので鼻が高くてカッコいいし、ウイットがあつて、たくさん本を読んで、たくさん本を書いて、翻訳をして、なにより、私の事を自由に育ててくれた自慢の父でした。昔から、父は私に「本はたくさん読めよ」と言っていたのですが、この年になっても、その言いつけだけは守る事が出来ないでいます。私は本を読むと、すぐに眠くなってしまうからです。

高校の時、まぐれで進学校に合格して、一時は東大を目指して勉強をしていた事もありました。予習も復習も大嫌いで、その日は、宿題もしないまま英語の授業に出ました。ところが指されてしまい、読んでから訳さなければなりません。仕方なくアンチョコを見て

訳し終わった時に、「平野君、訳がページ違ってるよ」って。これがきっかけで、「ああ、もう学校は大嫌い」と思って、次の授業から家に帰ってしまいました。その日から学校には行かず、母に作ってもらったお弁当を持って登校するふりをして、山手線をグルグル。いつまでもそんな事しているわけにもいかず、一週間ほど経った頃、父に打ち明ける事に。辞めたい理由を沢山考えて、事前にどういふ返答になるのか自分の中でシミュレーション。父の前に正座をして「お父さん、学校辞めたくなっちゃった」って言った途端、父は私を見て理由も聞かずに、一言「あー辞める辞めろ。レミにはもっと自由な学校があるぞ」って言うてくれたんです。その後の人生はバラ色でした。

結婚する時に父が一枚の色紙を手渡してくれたのが「風強ければ神様は靴のかか
す
に
棲みたもう」という父の詩でした。詩の意味を父に聞いても「いいからいいから」と言うだけだったので、深く考える事もなく時は過ぎてしまいました。父が他界し、あらためて父の思いやりを感じた時に、ふっと、詩の意味が私なりに解釈できたのです。強い風というのは、嫌なことや人生の中の荒波で、そんな風で私がふらつきそうになった時に支えてくれる神様が靴のかか
す
に
棲んでいるから、何も心配しないでいいんだよって言ってくれている気がしています。



東京生まれ。主婦として家庭料理を作り続けた経験を生かし、「料理愛好家」として活躍。「シェフ料理」ではなく、「シェフ料理」をモットーに、テレビ、雑誌などを通じて数々のアイデア料理を発信。著書に『平野レミのつぶやきごはん』（宝島社）、『平野レミのあかちゃんといっしょごはん かんたん取り分け離乳食』（金の星社）など多数。公式サイトに「レミレミ通信」(<http://www.remmy.jp>)がある。